

じたが、こうなれば「仕方ない、何とかなるだらう」といふ根性が飛び出して、不安心ながらに安らかな夢を結んだ。

開戦前の四五日

翌日無事に停車場に着いて見れば噂程のこともなく、白前垂れの荷持ちは先きを争ふて客をつかまへようとして居るので、先づ以て到着早々赤帽の眞似事丈けは免かれたが、さて何やら落ち付かぬ町の様子は初目にもそれとうなづかれた、辻々は鬚面いかめしい憲兵が物々しく武装して眼を八方にくばつて居るのは常のこととして喧しい號外賣りの聲や、あちらこちらに町の人が集團を作つて、興奮した顔色で何やら罵り合ふ様子などはたゞ事ではないと受けとられたが午後大使館での話によると、當時既に塙塞間の風雲は頗ぶる急で、いつ破裂するかも知れないとのことであつた、越えて二十八日には、ついに塙國の對塞宣戰の布告となつたが、露西亞はこれに先き立つて、戰局を兩國の間に限定せしめやうといふ獨逸の提議に反對することを公表して居つたので到底戰は避けられまいといふ評判であつた。事情に通じない自分には、此の際になつてもまだ此の利口な歐羅巴の人が戰などを始めるものかといふ考は去らなかつたが、八時すぎになつても暮れ始めやうともせぬ街路を辿つて散歩する途すがらには、はやくも示威運動を起せる群集があちこちから練り出して、寺院の前では十字を切つて熱誠な祈禱を捧げ廣場では悲憤慷慨を極めた身振り口調で罵りたてゝ、既に戰は始まつたのかとも思はせるのであつた。